



京都の民主運動史を語る会 会報 題字 住谷悦治

代 表 岩 井 忠 熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込〕

口座番号 01060-7-15762

加入者名 燎 原 社



山科本願寺土塁跡

画 崩場 弘

編集後記

「闘争」前篇（九）

田中 豊蔵

大道氏追悼
弔辞（梅田 勝）

一九四七、四八年の同志社
湯浅 晃

北牧孝三と郷里「甘南備」
村島 昭男

北牧孝三と郷里「甘南備」

村島 昭男

氷室村尊延寺

河内国交野郡氷室村大字尊延寺、これが昭二の生まれた村である。

今の大阪府は、この河内国と摂津国、和泉国から成っている。ここに大和国、山城国を加えたのが五畿である。

河内国は、北河内、南河内、中河内から成り、交野郡は北河内である。

皇国史観という、歴史科学とかけ離れた史観が巾をきかせていた頃、河内国生まれの楠正成は日本第一の忠臣だったが、この悪党と云われた豪族の生地は南河内である。

明治維新で河内国は堺県となり、昭二の出た氷室小学校の前身(平松校)は明治五年八月、堺県の第六三番小学校として、尊延寺村の来雲寺に開校した。

この氷室村尊延寺を地理で俯瞰すると次のようになる。

大和と河内を分ける金剛、葛城の連山が、北東へ延びたところに、標高六四二メートルの生駒山が、大阪城に向き合っている。

この生駒山の稜線が背を低め、幾筋かの谷合いをつくり、飯盛山で再び隆起する。

生駒、飯盛の窪みを大和に越えると斑鳩の法隆寺で、その先奈良盆地のはずれに平城京がある。

飯盛山は知られる通り、大楠公正成が湊川で討死にし、その子正行が吉野に雌伏一二年、足利軍勢と飯盛山に合戦に及び、高師直に一蹴されて、楠一族が遂に滅亡する古戦場である。時に一三四八年、四条畷のホトトギスと哀切の声を上げる地である。

明治三六年この山麓に往古の合戦の地にちなんで、府立九中・四条畷中学が開校した。

飯盛山は、大和と河内を隔てつつなおも北に延び、扇状に広がる交野平野に姿を映しつづつ稜線を下げ、星田をすぎ、津田との境の神

宮寺村の辺りで(交野山^{こうのさん})^(鴻尾山とも書く)と呼ばれる、山頂に巨岩を乗せた山塊をつくる。この山稜が尽きるのは、氷室村穂谷で、越えるともう山城の国である。

生駒から穂谷につながる山脈の、河内側の水はすべて淀川にそそぐが、南東側、大和山城の水は淀川の上流、木津川に入る。交野郡はこの山脈と水系に取り囲まれた地である。

昭二が生まれた頃の交野郡氷室村は、穂谷川の川下から杉、尊延寺、穂谷の三つの村落が次第に山間いに入る地勢で、杉は六〇戸ほどと一番小さく、それから一キロ程で山間がややひらけて、戸数一五〇戸の尊延寺になり、更に一キロ程のぼると、山腹に八〇戸の穂谷の集落が見え隠れする。それが氷室村だった。

この氷室村尊延寺から、山城の田辺村へ越える峠の左に「甘南備山」がある。

広辞苑(新村編・岩波)には、奈良時代から神の鎮座する山としてあがめられた斑鳩の三室山、明日香村の三諸山、田辺町薪の甘南備山の三つのかむなび山をあげている。

標高わずか二〇メートルにすぎないこの甘南備山が、物心ついて以来、昭二の胸にどっかと座っ

ている。

祖父に比べると父の錠太郎は、無神論者であった。母の病氣平癒を祈って、二月堂にお百度をふんだりしたが、根は無神論者で、一種の合理主義者と云えるかもしれない。

だから父の戒名は「信士」である。長く区長を勤め、津田町農業委員であり、見識の高い村の名士だったが、「禪定門」ですらなかった。父は「五重」を受けていなかったのである。

五重とは、一五年か二〇年に一度、お寺が催す、在家者の得度修業で、彼岸への準備である。

一九二二年、杉山元治郎を中心とする日本農民組合運動が、大阪から始まり、北河内はその拠点であった。

錠太郎が、杉山等の話を初めて聞いたのは昭和五年であり、ひそかに共鳴を覚えていた。

不況と泥沼の戦争拡大は、農民達の中に、ひそかに厭軍、反戦の気を醸成させていたのである。

日本の敗戦を信じて疑わなかった錠太郎は後年昭二にこう語っている。

「杉の長野宇兵衛さん知ってるやろ、母親はうちのおばあちゃん(タケ)と同じ天王の出や。あの家

の下の子の英夫さん、沖縄戦で陸軍参謀で戦死しやがったが、兵隊なんかならんで東大か京大でも行つてはったら、今頃えらい学者か役人になつてはったのにおしいことや。時代の風潮がそうさせたんやが、軍閥は国も長野さんも、誤らせたんや」

弾圧

穂谷村には南姓が多いが、なかで「南さん」と云えば、南正雄氏の家を指す。穂谷村の地主だった。

イクエの弟、井上芳治より二つ上で二人は巾着のようにくつついて野山をかけめぐり、とりわけ正雄氏は無鉄砲のいたずらっ児だったが、学校の成績はいつも一番だった。

四条畷中学へすすみ、四年生頃から「改造」を読み、急速に左傾した。

その正雄氏が、前年成立した「治安維持法」の威力をみせつけんばかりに、警察の取調べを受けたのは、昭和二年夏である。

改造を読むきっかけになった事情や、思想上のつながり、その人脈や、影響を与えた人物などが徹底的に追及された。

「それはもう、見てられんほどむごおしたわ。この国賊の殺つづ

しめが」とののしられて、三人がかりでなぐる蹴るの拷問を親の目の前でやられるんですさかい、つらいの何の……」

一緒に出頭した親の口から話が伝わり、おこわと村人は口をとざし、折りからの世界不況の始まりが、暗い影を差し始めているなか、村人は一層内に閉じこもるようになって行った。

三日目、転向の誓約書をしたためさせられた正雄氏は、顔中あざだらけで、親に添きそわれて帰宅した。

四条畷中学では、退学か放校かが検討されたが、校内に仲間をつくった様子もなく、事件を知る人もなかったため、処分はかえって耳目をそば立て、騒ぎを大きくするとういう消極論を楯にして、処分に反対する担任の意見が通り、新学期が始まった九月、正雄は説諭を受けただけで、穂谷から四条畷まで、自転車と汽車を乗り継いで通学した。

実践運動に入ったわけでもなく、論文や言説で革命をせん動したわけでもない。唯「改造」で読んだ論文や社会主義の理論についての感想を周囲にもらしたにすぎない。たったそれだけの事をかぎつけ、これ程大げさに弾圧したのは、赤の思想は双葉のうちに摘み

取るという方針に従うものであり、伝播を恐れるのあまりである。

世界に版図を拡げようとする大日本帝国の意図は、その權益に於て欧米と衝突を始めており、領土拡張の野心は軍縮の流れに逆行せざるを得ず、このことが国内に様々な矛盾を生み出していた。

軍拡による重税、過剰生産恐慌による貿易不振、失業者の増大、貧困の蓄積。エログロナンセンスの走りも始めていた。

それだけ、赤の思想が蔓延する土壌は醸成されていた。この火種が燃え広がるのを恐れた支配層が、萌芽の内に摘み取ろうとしたのが、南正雄事件を始めとする、各地の弾圧である。

何が南正雄を引きつけたのか、田舎地主の伴として、農村の貧しさは見て、実感する立場にはない。社会的矛盾を感じるにはまだ社会人ではない。社会を科学的に解析し、到着した思想というには、勉強も経験も浅い。

あるのは純真な青年の感受性と、持ち前の正義感が、「改造」論文によって触発されたと云うしかない。

しかしこの頃、各地にこのような思想が生まれ、運動が起こるには、客観的条件があり、必然性、普

遍性が存在したのだ。

錠太郎の弟辰三が、山田村田の口の藤原家(麴屋)に養子に入つて待望の男子が生まれたのは昭和二年である。祖父の伊太郎は、一と付けようとしたが、母親フミエの実家、養父の北牧家の長兄が、同じ「一」なら「肇」の方が良いと云った事もあり、肇と名付けられた。

この肇の叔父の孝三は、その頃立命館大学の夜学を出て、京都の郵便局に勤めており、全協の活動に参加しながらひそかに共産党に入っていた。「肇」は「貧乏物語」の河上肇にちなんだ名前だったのである。

孝三は甥の名前に肇を進言した翌一九二八年、共産党員一斉検挙で、川端署に留置され、はげしい拷問を受けた。

伊太郎の弟忠二郎は、北牧家に養子に入つた立場だけに、肩身のせまい思いで、村の人達に知れるのを恐れながら、京阪電車で京都まで面会に通つた。やつれて、人相が変わるほど拷問にさらされた伴に、警察の強要で、共産党がどんなに悪いかを説き、これ以上親に心配かけないよう、運動から身をひく事を、懇願するよう説いた。しかし孝三は黙秘して答なかった。その孝三を後手にしぱり

上げた特高は肩と云わずひざと云わず親の面前で竹刀を振り下ろした。足を引きずり、留置場につれ戻される俣の後姿を見ながら、暗たんたる気持ちだった。

「兄貴、可哀そうやが孝三は廃嫡することにした。本人の方からそう云うので、家督は弟の勤に継がせるさかい、あいつのことは許したってほしい」忠二郎は兄の伊太郎にこう告げた。

「天子様に楯つく思想ではやむを得んなあ、孝三のやつ、どこでそんな思想にかぶれたんやろ。それにしても親思いの孝三やさかい、類が親や親戚に及ぶのを避けるつもりやな」

「これで村へも親戚へも申し訳が立つので、ほっとしてるとこや」
「辰三の兄の錠太郎はん、こない云うてはったで、大きな声で云へまへんけどその内、世の中も変わるよって、孝三はん達の時代から来るかもしれまへん」とな。そのときの錠さんの話では、お前は知らんやろが、穂谷の南さんの息子さん、四条畷中学やが、同じ思想でつかまらはったということや、よう勉強するもんがこの思想にかぶれるらしいな」

孝三は懲役五年の判決を受けて下獄し、獄中でつぶさに苦難をなめて、三年で出獄した。



敗戦後いち早く復党した孝三は、党が分裂を克服した後、京都市会議員を三期つとめ、八三歳で他界したのは一九八八年である。
(むらしま あきお・元東京土建労組中執・松戸市在住)

一九四七年・四八年ごろの同志社

湯浅 晃

私が五年制の旧制同志社中学校をへて、旧制の同志社大学予科に入学したのは、四七年四月でした。当時は、アメリカ占領軍による二・一スト禁圧できびしい情勢もみられましたが、学生には戦後の民主化をすすめるという気運の高まりもみられ、そのなかで、日本共産党や青年共産同盟(略称は青共、いまの民青の前身)のメンバーが活動をはじめていました。そして、大学、予科、外専(外事専門学校)、女専(女子専門学校)の党員や青共同盟員の十数名が、御所の中で、青空の合同会議をひらいていました。そのときのキャップは、中村裕氏(その後運動をはなれ、京都で教員となり、中学校長)で、健在です。私は最初は青共として、のち党員としてこの会議に参加していきました。

アメリカ帰りの湯浅八郎総長は、戦前は軍国主義に反対した生物学者とのことでしたが、私たちの学生運動には好意をもっていませんでした。四七年の私たちの運動で最も注目すべきことは、同志社当局が予科を今出川から岩倉に移転させようとしたことに反対するたかひでした。私たちは、岩倉では通学が不便になるからとの理由だけでなく、主に同志社当局のマスプロ教育(大勢の学生を入学させて、学園を経営中心に運営していく)の方針に反対したのです。当局が強行の構えを見せるや、ストでたたかおうと訴え、多くの学生の共感をえました。当局は、この運動の首謀者は高山寛氏(その後運動をはなれ、現在は自民党の府会議員)と私だとみなし、処分の協議をはじめたのことでした。しかし、高山氏の祖父中村栄助が、新島襄が同志社を今出川に創立したとき、その土地を寄付した功労者であったため、処分はまずいということになり、私も助かったとのことでした。学生運動の力で、ついに岩倉移転計画は、中止となりました(五〇年

たった九八年の予科の同窓会で、この運動で私に感謝した同窓生がいました。

四七年秋からは、私たちは東山の不当課税反対闘争にかけつづけた。京大から加納氏（のち府副委員長・故人）ら、京都女専から野田さん（のち中国に行った）ら、朝鮮総連から山根さん（北朝鮮に帰国した）らも応援にかけつけていました。事務所が、東山通り七条下ル東側の民家をかりて設置されました。当時の課税は家や土地もとられるというまことに過酷なもので、多くの業者の人たちが、不当課税の是正を要求するため、事務所に集まってきました。そして四八年一月には六原小学校で決起集会をひらき、さらに東山税務署までデモ行進をおこない、集団交渉で是正を要求しようということになりました。当日の集会には約一〇〇〇人の業者のみなさんが集まり、府委員会を代表して儀我さん（のち大阪市大教授）が、激励のメッセージをおくりました。そしてデモして東山税務署に行き、広い部屋をとらせて、署長らと公開の集会交渉をおこないました。会場にはアメリカ占領軍の将校が様子をみにきていました。この東山の運動が納税民主化同盟、そして現在の民商に発展していつ

たと聞いています。

私たちの合同会議は、古典の学習会をひらき、また西口克己地方委員（のち作家、府市会議員、故人）をまねいて公開の学習会もひらきました。山海秀明氏（故人）と私は、共同編集で雑誌「二十一世紀」を発刊し、科学的社会主義をひろめようとしめました（ただし、第三号で廃刊）。これには田畑忍、岡田良夫らの先生も寄稿してくれました。

四七年には京都自由人権協会が結成され、同志社の学生から山本浩三氏（のち同大教授、公安委員）と私が参加しました。理事会は、弁護士会館や京都クラブ（南座の中にあった）でひらかれ、会長瀧川幸辰、理事長高山義三、宮内裕、瀧川春雄、小林明、市川（医師）、乙川（夕刊京都）、坪野米男らの諸氏が出席しました。山本氏と私は末席にいました。当時はまだ瀧川氏も高山氏も進歩的な姿勢をとり、人権擁護の立場から南座で模範裁判をひらいたりしました。（ゆあさ みつる・京都民報社長）

大道俊氏追悼

戦前からの社会運動家であり、戦後には京都で顕著な活動をされた会員大道俊さんが昨年十二月六日になくなられました。「大道俊さんを偲ぶ会」から当会にも記念誌の御送付を受けましたので、その一部を転載させていただきます。

大道俊さんの経歴

一九一〇年三月六日、大阪府西成郡大道村、現在の大阪市東淀川区大桐町の禅寺で、十人兄妹の末子としてうまれる。父親は塩酸の製造に成功して財をなし、何不自由なく両親にかわいがられて成長。

一九二二年、当時資産家の娘が多く在籍した梅花高等女学校を卒業。この頃、兄たちは片山潜の影響をうけて労働運動に参加、先駆的な活動をしていた。一九二九年、両親が病死、家も没落。経済的自立をもとめて、難波に開店したばかりの高島屋に就職するが、まもなく労働運動に入る。全協（日本労働組合全国協議会）傘下の化学労組の事務局で新聞づくりを手伝いながら、ゴム工場で働きオルグ活動。この時の指導者であつた青年と結婚を約束。

一九三一年九月、満州への侵略を前にしたいっせい検挙で逮捕、拘留される。自由になると臨時工として働きながら、化学、硝子、繊維の組合分会づくりを続ける。一九三二年、共産主義青年同盟大阪市委員。何度も逮捕拘留されるなか、大阪中津署で女性として屈辱的な拷問をうける。一九三三年四月、服役中に吐血し仮釈放された婚約者を見舞うが、その翌日逮捕され、そのまま離ればなれに。七月末、治安維持法違反で起訴され、大阪北刑務所で二年間つながられる。女性の思想犯ばかりの獄舎で待遇改善などを要求して果敢にたたかう。

出獄後、一九三八年、助産婦、保健婦の資格をとって働きはじめるが、経歴が知れるたびに解雇され、職を転々。終戦をむかえたときは住込み家政婦であつた。

一九四六年三月、京都で日本共産党に入党。深刻な食糧難のなかで、京都仁和学区を拠点に「米よこせ」のたたかいの先頭にたつ。その後、京都上京生活を守る会の専従となり生活擁護、重税反対の運動を指導。「日雇い労働者にもモチ代を」などの要求でたたかうなか、一九五一年七月、西陣職安に登録、日雇い労働者となり、日本の復興を底辺で支える人びとの

なかで働く。

一九五二年、全日本自由労働組合の結成と同時に、失対労働者の四割を占めていた女性の先頭にたち、保育所の設置や産前産後休暇などを要求してたたかう。一九五三年、全日自労婦人部の結成に尽力、副部長に選出される。

一九五六年、ハンガリーのブダペストで開催された第一回世界婦人労働者会議に二名の日本代表の一員として出席。その帰途、五〇日間にわたって東欧、ソ連、中国を訪問。

一九五九年、全日自労中央本部執行委員に選出され、以後一六年間婦人部長として活動。一九六一年、全日自労全国大会で、婦人部の日本婦人団体連合会への加盟を決定。「組織された婦人労働者が、婦人運動のなかで、階級的立場から婦人解放のためにたたかう意義」を明確にして、婦団連副会長を二〇年間つとめる。この間、総評婦人部常任委員となり、総評を代表して、日本母親大会連絡会常任委員となる。一九六一年、京都、大阪でひらかれた第八回日本母親大会ははじめての地方開催となったが、全日自労からのべ四千人が参加して大会成功に貢献。地方開催に反対していた総評から「方針に反する」と批判され、婦人部常

任委員からはずされた。しかし、母親運動はこの大会を契機に飛躍的に発展した。

一九六二年、新日本婦人の会の結成に際し、発起人の一人として尽力。中央常任委員、中央委員として、「核戦争を許すな、婦人の権利と子どもの幸せのために」の婦人の目的実現のために活動。一九八六年からは中央委員会顧問。

一九八〇年、七〇歳で大阪に帰ってからは、「暗黒政治の再来を許さない」と治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟の組織強化に力をつくし、中央常任幹事、大阪府本部副会長、婦人部長を歴任した。

一九四六年、日本共産党に入党。京都府委員会の幹部として活動。一九五九年から全日自労中央グループのメンバーとして、また党中央委員会婦人部の非常勤部員として活動。常に日本共産党員としての誇りと自覚をもった活動をつらぬいた。病気のために第一線を退いてからも、「しんぶん赤旗」をよく読み、日本共産党への熱い思いを持ち続けた。一九九六年、五〇年党員として登録される。その生涯は、平和と社会進歩、女性の地位向上と働くものの幸せのために、私心なく、情熱をかたむけ

た一生であった。

一九九七年一月六日、大阪市東淀川区の成仁会病院で死去、享年八七歳。

弔辞

元全日自労婦人部長、大道俊さんの葬儀にあたり、私は謹んで哀悼の意を表します。

大道さん。つい先頃、お元気そうなお電話をいただいていたのに、あまりにも突然の訃報に驚き、私は言葉もありませんでした。遠く大阪からかかってくるあなたのお電話は、いつも元氣一杯の勢いを感じたもののばかりでした。二、三〇分位はあつという間に過ぎたことをつい先ほどのことのように思い出され残念でなりません。

大道さんのお付き合いはかれこれ五〇年、半世紀にわたります。戦後、私は京都紫野にあった島津製作所で労働運動に参加し、日本共産党に入りました。そのころ上級機関から支部に指導にきておられたのが大道さんでした。当時、私は二〇歳、大道さんは三〇歳台後半で童女のような生き生きとした顔をされていましたが、髪の手だけは真っ白でした。後々、聞いたところでは、戦前、戦

争に反対し、治安維持法で弾圧されたときいっぺんで変色したことを知りました。戦争中は軍国少年だった私にとってショックでした。以来、私は尊敬の念をもっていろいろとご指導をうけてまいったところだ。税関問題で地域と一緒に回り、生活を守る会を組織したこと、島津争議のときには、三月八日の国際婦人デーにことよせて、大規模な支援共闘の集会を組織していただいたこと、一九五〇年一月九日の有名な円山事件をともしたたかったことなど走馬灯のように思い出されてまいります。私が弾圧されて、京都拘置所に拘留されたときは、分厚い本を差し入れてくださいました。お陰で良く学習することもできたのであります。

大道さんは、その後日雇い労働者、失対労働者の組織化に取り組み、やがて、京都を離れ、東京で全日自労婦人部長として、広く婦人戦線の分野でも活動され、全国的にも大きな貢献をされたのであります。

日本共産党の六全協の後、私は一時、京都福知山で活動しましたが、当時は財政が困難で自立自活の方針をたて、昼間は失業対策事業で働き、夜は党活動に専念するという時期がありました。そのた

め全日自労福知山分会の書記長を務めたことがありました。

ところが、一九七二年一月の総選挙で京都第一区から谷口善太郎さんと私が複数当選したときには「自労出身の代議士が誕生した」と大変喜んでいただいたのであります。大道さん、ほんとうにご支援ありがとうございました。

大道さんが引退され、私も引退しました後は、時々、大道さんから長電話がかかってくる関係だけになりましたが、感心するのはその情熱の激しさでした。

「あんだ、ぼやぼやしてたらあかんで。私もまだまだひと花咲かさなならん」とすごいけんまくでした。いまの激しい情勢の動きに

敏感に反応されていたのですね。その点は、まったく大道さんらしく、あなたは、情熱を燃やし続けた永遠の闘志でした。私もその激励に応えるため「消費税をなくす京都の会」の代表世話人の一人として、また、来春の京都府知事選挙と、つづく参議院選挙の勝利めざして微力ながらがんばっているところでございますので、どうか

ご安心ください。思い出はつきませんが、もうお別れです。大道俊さん。

いまは安らかに眠りください。さようなら。

一九九七年二月八日

元衆議院議員 梅田 勝

闘 争

前篇(九)

田中 豊蔵

一、一方は大土建企業こちらは
一労働者

昭和一〇年頃から一四、五年頃に及んで、京都市交通課の仕事を請けおい、電車の軌道敷の砂利、

砂等の板石の工事を行い大もうけをしていた青木組というのがあります。

この青木組は滋賀県の後の社会党代議士、矢尾喜三郎氏に頼み野洲川の改修にからんで砂利、砂を

引き上げ京都に持ち帰り市電工事に利用していました。この青木組につながる京都市の社会党の有力な市会議員がいました。

戦後、市電はバスにとりかえられましたが、青木組は社長を青木光造と言ひ兄弟三人で経営を行っていました。代々の交通課とつながり、鴨川や桂川などの河川改修の仕事そして大建築の仕事を行うようになりました。また、市の地下鉄工事にも大林組や間組等の下請にも入り、市長選挙の時にも市議会選挙の時にも青木組は社会党の有力議員をおしました。私は下京区東九条山王町九二番地に居住をしており、青木組の社長の父親青木仙二郎は同じ町内で私と同じ牛馬車の運搬業でした。しかも出身地は滋賀県栗田郡笠縫村大字新堂、私の父母の隣村でしたからよく知っております。今日の社会党・解同と権力と大企業との癒着、政治的墮落の原形のようなものでした。

同じ東九条の牛馬商、運搬業でも一方は権力や社会党・解同と組んだ大土建企業へ。一方の私の方は、弾圧につぐ弾圧で特高に追いまわされ、京都では牛馬運搬業の仕事が統制されてなくなり、私は大阪の運送会社につとめるようになりました。

ところが、その大阪の会社まで特高が行って、「田中は危険人物やから雇うな」といって会社に圧力をかけました。そのため、私は会社を転々とせざるを得ない状況です。これについては追々語ることにいたします。

二、大阪で働く

月日がたつのも早いもの、昭和十六年二月八日風雲急を告げます。日本は米英相手の太平洋戦争を始めました。

私は、日本無産党事件以後二年半、死にもの狂いで大阪の各工場や運送会社を転々として働きに回りました。大阪府下堺港の住友工場製板部に大型機械を運送、取付けの仕事です。

朝五時一〇分、京都発の電車で大阪着、また電車を乗り換え堺港のうめ立て地の工場へ機材を運送いたします。京都に帰るのが夜遅くなります。

二月一七日には、兵庫県尼崎市杭瀬の山下運送店に行きます。朝五時一〇分の京都始発の大阪行きに、毎日乗りこんでいる人がいます。それは東七条の部落の人で、兵庫県西宮に、いわしなどを買い出しに行く人々です。約六〇人の人びとが京都ではなかなか魚が手に入らないので、西宮まで買

い出します。これを京都に持って帰り、天びん棒でかつぎ市中を売りに回るので。

「とれたてのいわしやー買いなはれ、さあさあ買いなはれー、買いなはれー」

と、叫び飛び回ります。金持ちから頼まれた生きた上等の鯛も持つております。毎日毎日同じ時間に乗り、私と一緒に。彼らは西宮の漁港です。私はさようならと言つて、杭瀬の駅で別れます。そして杭瀬の山下運送店に到着します。朝七時すぎ、向いの工場に行き、川崎製板下請工場の天井クレーンをつり上げて組み立て工事を行います。私は寒さにもめげず上、下、横注文通り、チェンボロッコで組み立ての仕事をし、夜五時までが定時です。

「京都さん、残業してくれませんか」
「何時まで」
「九時頃までのんます」
工場長のたのみです。私は引き受けました。

残業のパンは市中にはありませんが、神戸川崎工場から持つてきております。

運送店の社長は「田中さん、寒おすなあ」といって、種子島の黒砂糖を一かたまりくれました。京都の家では妻や長男長女、甘い物

にはありつけません。私は持つて帰つてやろうと、社長に礼を述べて弁当箱に入れます。社長はそれを見て、「田中君、食べたかどうか」と申されました。私は「家では、つばくろが口を開けて待つております。よばれたのも同じです」。社長は可愛そうに思つたのか、大きなかたまりを二度くれました。うれしかったこと、半分食べて残してやりました。

工場の時間がきたので出て行きました。工場長、部長、班長ら上級の人だけがのこっていました。外は寒い風が吹いていました。それでも私は上着をぬいでチェンボロッコをまわしました。「やる気だのう」と言っていました。夜九時をすぎた時、神戸の川崎製板会社から、「明日、天井クレーンを取りつけるから、今夜は徹夜で仕上げるように」と、電話で指示がありました。

「京都さん、徹夜でやってくれるか、運送店の社長にもたのみに行つてくるから」
と、言つてたのみです。

私は、「承知しました」と引き受けました。工場長と社長は喜んで、私に夜食の丼を食べさせ、徹夜は二人分の支給、米二合、飯ごうに入れてくれました。私もうれしくて、うれしくて涙が出まし

た。当時はそれほど食糧のない時代でした。朝五時頃までに溶接もでき、朝一番の出荷ができるようにして働きました。工場の人びとは大喜び、私は朝まで工場内の部屋で寝ました。部屋というようなのでもありませんが、工員の毛布三枚を体にまきつけて夜明けまで寝たのです。

運送店の方では、工場の出口がせまいので困っていました。「心配いりません。馬でも牛でも、私が国道まで出します」と、私はクレーンを二台の馬車にわけて積み込み、うまく表の国道まで出しました。そして神戸市葺合通りの川崎製板会社に納品しました。そして、私は午後三時頃に杭瀬の工場に帰りました。運送店の主人も工場の社長も、「こんな狭い道を三二尺の長尺なクレーンをよく出せたなあ」と感心して下さいました。

私は、心づけをもらい、運送会社へ帰り、二軒目の銭湯に入り、夕食を頂戴して、「社長、またどうぞよろしく」と一礼して、夜の八時に心はれやかに京都の自宅に帰ることができました。

編集後記

「北牧孝三と郷里『甘南備』」は村島氏の了解を得て、著書『甘南備往還』から抄出させていただきました。

会および会報については、左記へご連絡ください。

〔事務局〕

〒六〇五-〇九五三

京都市東山区今熊野

南日吉町三九 奥村和郎

TEL 〇七五-五六一-七四八五
FAX 〇七五-五六一-七四八五

